

実感を伴った理解を図り，自らの考えを深める児童の育成

本研究では，自然の事物・現象の性質や働き，規則性について「分かったつもり」「知っている」という理解ではなく，観察・実験したことが「自然の中で成り立っている」「生活の中で役立っている」と感じられる理解ができる児童の育成を目指している。そのために『実感を伴った理解』が図れるような場面を設定した学習計画を立て，その過程で，児童自らの考えを深めることができる理科指導の在り方を追究している。

「実感を伴った理解」とは何か，小学校学習指導要領，理科の目標から次の3つ側面から捉えることができる。

①具体的な体験を通して形づくられる理解：体得

児童自らの諸感覚を働かせて，観察，実験などの具体的な体験を通して自然の事物現象について調べることにより，実感を伴った理解を図ることができる。これは，自然に対する興味関心を高めたり，得た結果から適切な考察を行ったりする基盤となるものである。

②主体的な問題解決を通して得られる理解：習得

自らの問題意識に支えられ，見通しをもって観察，実験を中心とした学習に取り組むことにより，1人1人の児童が自ら問題解決を行ったという実感を伴った理解を図ることができる。これは理解がより確かなものになり，知識や技能の確実な習得につながるものである。

③実際の自然や生活との関係への認識を含む理解：納得

理科の学習で学んだ自然の事物・現象の性質や働き，規則性などが実際の自然の中で成り立っていることに気付いたり，生活の中で役立てられていることを確かめたりすることにより，実感を伴った理解を図ることができる。これは，理科を学ぶことの意義や有用性を実感し，理科を学ぶ意欲や科学への関心を高めることにつながるものと考えられる。

各単元の学習計画の中に，これらの側面「体得」「習得」「納得」の場面を位置付ける。発達段階に応じて，仮説に根拠をもたせたり，観察・実験から分かったことを考察したりすることで，科学的な見方や考え方を養う。また観察・実験の計画を立てさせたり，学んだことと実生活の結びつきを考えさせたりすることで理科を身近に感じ，より理解が深められるようにする。

